

聖と丘

第29号
2008・6・8 発行
金光教 教学研究 所

「教祖と西大寺会陽」

第一部長 加藤 実

研究報告検討会の最中である、本年二月十六日夜、西大寺観音院の会陽を見物しようという話になり、連れだつて行くことになった。私たちは多くの見物客の波に流されるままに観音院の正門に続く門前の商店街へと向かった。通りは狭く、身動きできないほどの見物客でごった返していた。通りの中央を、祭りに参加するはだかの男達が肩を組み、かけ声を掛けながら観音院へと向かっていた。男達に両脇から水が掛けられ、たちまち湯気となった。

境内に入ると、「緊急放送！緊急放送！本堂南床面に、はだかが倒れている。警備本部から第六中隊へ。警備本部から第六中隊へ。速やかに、はだかの救出に向かえ。はだかの皆さんにお願ひします。もみ合いを止めて救出にご協力ください。」という放送が聞こえてきた。「はだかが倒れている」「もみ合い」「はだかの救出」！と日常の生活では、まず聞くことの出来ない言葉に、オーと妙な感心をしながら、人混みの隙間から本堂の様子を窺おうとつまずき先立ちになった。しばらくの後、なぜか女性の声で「はだかが無事救出されました。ご協力ありがとうございました。」

うございました。」とアナウンスがあった。今年の参加者は約九千人であった。本堂大床は約百坪あり、人口密度は一升柵に一人の割合だといわれている。押し潰される人がいても不思議はない。昨年は死者も出たそうで、警察もピリピリしているのか、警備は厳重であった。境内は見物客で一杯であり、熱気に包まれていた。写真を撮ろうと、少しでも本堂が見える位置を探してうろろろしている内に、人混みに押され、身動きできなくなってしまった。みんなとははぐれてしまい、一人さびしく臨時バスで帰るはめになった。



ご存知のように、会陽とは陰陽二本の宝木しんぎを裸の男達が奪い合う祭りである。宝木は午前零時に投下される。つま先立ちになって、宝木投下を待ったその時、本堂は真つ暗となり、カメラのフラッシュが光った。本堂のはだかの群れが一・五倍ほどグツと伸びたように見えた。男達がいつせいに手を伸ばしたからだろう。投下されてまもなく、どんなはだかの男達が門の方へと向かい帰って行く。争奪をあきらめたのか、作戦なのかはわからない。突然走り抜けるはだかがいた。見物客もいつせいにそちらを見る。いつ宝木が本堂から抜け出したのか全くわからない。後で、ニュースで知ったが、宝木を獲得した福男が名乗り出たのは、投下の約一時間後だった。肝心な宝木の争奪は見ることはできなかった。ただただ、はだかの男達の群れを見に行ったということだけである。しかし、祭りの熱気はまさしく肌で感じられた。

「覚書」に「西大寺観音へまいり。十四日出、十五日帰宅いたし」と短く記述がある。江戸時代は旧暦正月十四日が会陽の日であった。教祖は西大寺観音に会陽の日に参加している。だが、教祖が会陽に参加したと、「覚書」には記されていない。祭りの光景を見ながら、全く確証はないが、教祖は会陽に参加した、と強く思った。教祖は四十二歳となる厄年の正月、吉備津宮のおとうじが二度あったことを「出世」の知らせと受けとめながら、西大寺観音へと向かった。厄払いの願掛けに参加した教祖が、宝木の争奪を傍らから見物していたとはとても思えなかった。教祖も宝木(福)を求めて参加し



たはずだと。

むろん江戸

時代と現代で

は、祭りの様相

も規模も異

なっているだ

ろう。でも、祭

りの場にとび

かうかけ声、怒

号、人々の熱

気、闇と光とが

織りなすペー

ジェントとし

て、五感を通し

て迫ってくる。

その現場の空

気感、時間が隔

ていても、「覚書

」のごく短い

一文のなかにも

詰まっている

エッセンスを掘

り起こし、そこ

に深みを味わせ

てくれるのでは

ないかと思われ

た。そこには、

文献的な知見

だけでは

得られないもの

がある。



今回の『聖ヶ丘』では、「特集 見る ふれる

感じる ―フィールドワークの魅力―と題して、

研究者たちが、調査の現場で感じたり、驚いたり、

なるほどと納得したり、疑問がふつふつ湧いたり、

あるいは大いに考えさせられたことなどを、エ

ピソードも交えながら語ってもらおう。

特集

見る ふれる 感じる

フィールドワークの魅力

特集 其ノ一

「長崎県生月島を訪ねて」

所員 高橋昌之

信仰と迫害。禁教時代に苛烈な拷問に耐え、ついには命を落とすことになって、自らの信仰を貫いてきた人々。「潜伏キリシタン」について聞き知っているのは、こうした信仰者の姿だ。そして禁教が解かれた後、カトリックに復帰することなく、先祖の信仰を受け継いだ人々が「隠れキリシタン」と呼ばれるが、彼らは非キリシタンやカトリック信徒から差別されたとも聞く。こうしたことから「隠れキリシタン」についての私のイメージには、「潜伏キリシタン」に連続する苛酷な姿が二重写しになっていった。カトリックに復帰しないことが疑問でもあった。しかし昨年九月、長崎で開催された日本思想史学会二〇〇七年度大会に参加し、その時の見学旅行で訪れた平戸市生月島での印象は、私の隠れキリシタンに対するイメージとは少し異なるものだった。

生月島は江戸時代には平戸の松浦藩に属し、かつては捕鯨の基地として栄えた島だ。この島では領主が洗礼を受けたことから、一六世紀中頃には二五〇〇人いた島民のうち八〇〇人がキリシタンになったと伝えられている。島には今も、先

祖からの信仰を受け継ぎながら生活し、隠れキリシタンと呼ばれている人たちがおられるとのことだった。

生月島にある「島の館」という博物館を訪れると、昭和初期の隠れキリシタンの家が復元されており、内部には荒神、御大師、ご先祖とともに、奥の部屋には「垣内の御前様」(乳飲み子を抱く女性を描いた掛け軸)が祀られていた。また近年の彼らの行事を記録した映像には、和服で正装した人々が御前様の祭壇の前で祈願のオラショを唱えた後、和やかな直会宴を催す姿が映し出されていた。こうした光景を見ていると、ふと、これまで調査や資料を通じて見聞きしてきた金神講や御大師講などの講社を彷彿とさせられ、ある意味で拍子抜けするような感さえあつた。この感触は、ある固定した「隠れキリシタン」像や、その対極として「正統なキリスト教」という枠を用意して彼らを見る見方を浮き彫りにすると共に、具体的な生活を送っている人の持つ文脈そのものをいかに掴み取り、そこに信仰を見いだすかというところを、信仰観自体の叙述にまで及ぶ問題として問うてきた。



生月島から見える「中江の島」(手前の島)

その後「島の館」の学芸員に案内され、島内をバスで見学した。生月島の沖

合には、禁教時代にキリシタンの島民が殉教した「中江の島」という小島が見えた。そこはいまでも島民にとつての聖地で、生まれた子に洗礼を授けるときにはこの島に水を汲みに行くそうだ。また、あちらこちらにあるキリシタンの墓は、見た目は仏教徒のものと変わりないが、どれも中江の島に向いて立てられていると説明があった。他にも島内には幾つかの殉教地があり、どれもが聖地となっている。

今回、隠れキリシタンの方にお話を聞くことは出来なかつたが、学芸員の話によれば、彼らが先祖からの信仰を受け継ごうとする背景には、イエスやマリアへの信仰とともに、このように殉教していった島の先祖への尊敬の念が強くあるとのことであつた。また、隠れキリシタンの組織は信仰的な繋がりであるとともに、島で生活していく上での相互扶助的な役割を果たしていることも要因にあげられた。

彼らは、先祖から伝えられた生活の術を共有し、イエス、マリア、ご先祖、荒神、御大師など、暮らしの中で時々多様な神仏を崇拜しながら、時代に適応しつつその土地で生きてきたのかもしれない。そしてその組織は、目には見えない先祖代々からの連帯感や、共同体の中で果たすべき役割、また時にはしがらみとも言えるような人々の関係などが稠い交ぜとなつて支えられていると思われる。信仰とは、神仏へ向かう個人の意志で成り立つ面はあるにせよ、そうした眼差しのみでは捉えられないものを感じさせられる。わずか一日の滞在ではあつたが、島を離れるとき「なぜいまだにカト

リックに復帰しないのか」という問い自体が何かしらおかしく、奇妙に感じられると同時に、本教において、たとえば「教祖にかえる」といった場合に、いまに生きる人の実感からその意味と問題を捉える研究的な構えについて考えさせられた。

特集 其ノ二

「山岳修験学会見学会に参加して」

助手 佐藤道文

平成十九年十一月三〜五日にかけて、第二十八回日本山岳修験学会木曾御嶽学術大会へ参加した。学会の案内状を見たとき、「世の中には、こんな学会があるのか」と、怪しげにも感じつつ、魅惑的な印象を持った。

学会第一日目、夕食後、学会開催地にある百間滝木曾教会(御嶽講社)での護摩祈祷見学会があり参加した。

入り口には鳥居があり、中へ入ると開祖である普寛、覚明の像が安置され、仏前と神前が入り交じつた様式で祀られていた。外殿の中心には護摩壇があり、見慣れない光景に、多少の違和感と戸惑いを感じた。先達は、白衣



修験行者

に袴、頭にはハチ

マキ、背中に小さな幣を差し、手には錫杖といういでたちであつた。

いよいよ、ご祈祷が始まるのかという雰囲気になった時、参拝記念の手拭いが配られた。参拝者たちは、先達同様ハチマキをして、私も準備完了。もう気分は、すっかり御嶽行者である。護摩壇の前の一人の先達を囲んで、四人の行者が並び、先達の先唱でご祈祷が始まった。太鼓がドンドンと響き、錫杖がジャンジャンと鳴り、雰囲気だんだんと高まっていく。そして、信者さんが、護摩木を配つて下さつた。それぞれ体の痛い所など患部をさす。護摩木は回収されて、護摩壇へ。いよいよ護摩壇に、火が付けられる。その護摩壇の真上の天井から八垂の様なヒラヒラとした紙が下がっていた。護摩壇では天井から垂れ下がる八垂に今にも燃え移つてしまいそうなくらい火柱が立ち上る。八垂は熱風でヒラヒラと天井へ舞い上がる。室内に煙がうつすらと立ちこめてくる頃には、ご祈祷も最高潮に達した。煙の匂いさえも心地よく感じ、神秘的な気分になされた。先達は、護摩壇で燃えさかる炎に「エイツ」と声を発し、錫杖、背中に差しあつた幣を持つて、炎をコントロールするかのよう

に祈禱する。この神秘的で、気迫を感じるご祈祷を経験して、視覚、聴覚、嗅覚、そして第六感に訴えてくる修験道のご祈祷に比べると、金光教のご祈念は、やや薄味だと感じつつも、当初抱いた金光教との違和感や戸惑いも炎と共に煙と消えた。そして、実は、教会で御祈念をしている私も、先達と同様に、私が感じたような違和感や戸惑いの視線で人から見られ

ているのかと気付かされた。「金光教」とは、子供の時から慣れ親しんできたので違和感すらも感じてこなかった。このような他者経験をj得て、私にとつての「金光教」への向きは新鮮なものにさせられた。知らず知らずに私にすり込まれていたのは、「金光教」の信心であったといえる。一方、文治の祈り生きる姿に当然のことだが、「金光教」のイメージのすり込みはない。「金光教」こそ、そのところで見出された信心のことを指していただろう。「教祖を発見する」とよく口にしたりするが、この切り口で発見しているかどうか、カギになってこよう。

特集 其ノ三

「これが調査なんだ！」

助手 高阪有人

昨年度、阪神淡路大震災に關わつて神戸の桜口教会で嶋田先生、信奉者の方々からお話を伺つた。その調査で私は、関連資料からは思いもよらないような発言に出会つてゐる。その出会いは、震災の体験談を聞かせてもらうということへの私自身の姿勢の構えなおしをさせられるという経験になっている。そのような調査はまた「調査・フィールドワーク」を幅広く捉えさせられる契機になつてゐることを感じる。そう実感することとなつたきっかけの一つを紹介したい。



桜口教会での調査風景

「それ外してくれ」

インタビューのなかでの嶋田先生の言葉である。この言葉は、被災地にくる金光教のボランティアの人に「金光教の看板を外してくれ」と言つたというものである。それは様々な宗教団体が教団名を

鳥屋のご主人のものである。そこで笑顔でおつしやつた、この言葉に出会つた。

信奉者ではないこの方がおつしやるこの「金光教」は「嶋田先生のお仲間」といつた意味に等しいようなものであるだろう。そのような意味で「金光教」という言葉を好意的な笑顔でおつしやつた。その時、先の嶋田先生の話、「人が人を無条件で助け合う」という言葉が思い出され、その活動や、そのことが生み出していつた地域の人々との関係のあり方をみるような思いがした。その、「金光教の看板を外した活動」を通じて築かれている関係のなかで、地域の人は、嶋田先生その人の動き方を見て、そこに金光教という言葉を重ねておられるのである。そのような間柄に嶋田先生の願いが息づく様を感じ、またその後の活動を語られた言葉の重量感や地域にあるあり方を見るような思いもした。このことは、因果関係が語られたものに留まらないものとなつていまも印象深く残つてゐる。

調査後の食事の場での先の一言との出会いは、アクシデントのようであり、その一言がインタビューでの嶋田先生の言葉とつながつてくるとは思つてもみないことであつた。このことは勝手な想像かもしれないが、言葉を内容だけでなく、その語るといつた行為に触れる、そのことを意識することとなつた経験である。私は、この場面を思い出すときに、身の回りが潜在的なフィールドであることをいつも思い起こすのである。

掲げ、やつてくることjが、被災された方々に不愉快な思いをさせること、また嶋田先生の「人が人を無条件で助け合う場にしたじ」といつた願いからであつた。そしてその願いは、その後の活動を通じて近所の人に伝わつていつたことを話された。私は、インタビュー中にはこの言葉を「被災者の感情、嶋田先生の願い↓看板を外す↓地域の人々との関係が生まれる」といつた因果関係の認識が話されたように聞いていた。ところがその話は違つた場での思いもよらない人の一言で新たな一面を見せることになつた。

「金光教の方ですか」

これがその一言である。これは調査も終了し、帰途につく前、食事のために入つた、教会向かいの焼

「もっと開いて」

研究員 岩崎道與



この春、息子が高校受験を体験した。その入学志願書に

志望理由を書くことになり、親子

で話し合いが持てた。息子は将来お道の教師になりたいと思っている。だからそのために大学に行つて勉強したいと言う。

お道の教師になるために大学に行くという筋道をもう少しはつきりさせたいとの親心プラス、自分の学生時代の反省を込めて、次のような注文をつけた。

お道の教師になりたいのなら、自分を取りまく世界が開かれていくような生きる力、信心の力を培ってほしい。そのためには大学へ行つて「教養」を身につけてほしい、と。案の定、息子からは「教養とは」という問いが返ってきた。そこで「教養とは、問う力と全体を見る力である」と答えた。

さて、翻つて教学研究(所)である。たまに教学研究会と呼ばれ、そこでたまに公募という名の発表をして賑やかしている程度の門外漢の私が言わずもがなであるが、教学研究所の「信心の自己吟味、信仰生活の拡充展開」は、ま



さに問う力の発揚である。その問いの矛先は、神様であり、教祖であり、己であり、教団であり、世界や社会や人間であり、過去現在未来である。そしてそうした問う力は、まさに教学研究所の外である、教団や教会、社会に向けられた信仰の問いになって光彩を放ってきた。

ところで、その光は今どのような輝きを発しているのだろうか。光はどこに向けられ、どこに届いているのだろうか。今回は教学研究所への要望や期待を寄せてくれとの依頼なので、それこそ期待と親しみを込めて言わせてもらおう。「全体を見る力」をもっと發揮してほしいと。

教学に打ち込む研究者は、それぞれの信心の問いからその論を展開してきているのであろうが、その問いを立てる己とはどういう場にいるのであろうか。研究所という場だけではなく、生活の場もそこにはあり、そうなる社会や世界が絡んでくる。お道という視点からすると、教団という場にある研究所であり、それぞれは広前という場に在籍して信心を進めている。あるいは、学究ということからすれば、学知の場の動向と影響を受けているはずである。そうした己が立っているいろいろな場が、教学研究にどう関わり合っているのだろうか。もちろんこれはバラ



ス良くまとめろなどと言いたいのではない。全体を見ての問いは、生きること、すなわち信心をすることそのものの問いである。それがぐいぐいと伝わってくる、ということは、つまり研究者にとつての「生きる」ということへの、あるいは「信心する」ということへの希求の姿がぐいぐいと迫ってくる教学研究は、受けるこちらもぐいぐいと引き込まれ、私の中に問いが喚起される。冒頭でも少し触れたが、全体を見るところとは、己がどう開かれていくのかということだと思ふ。研究者の開かれが、こちらの信心を開いてくれる。虫のいい話かもしれないが、そんな研究にもっともつと出会いたいと願っている。

さて、教学研究所では最近、布教功労者報徳祭時での教学講演会や、地方へ出向いて行つての教学に関する交流集会を実施し、場を開こうとしている。これらとても素晴らしいことだと思ふと同時に、そうした機会が本当の意味での開かれる場になることを期待している。そして開かれていくためには、持ち方にほんの少し「遊び心(キントリツヒ Kindness (独))という意味」を加えてもらいたい。これも虫のいい注文なのかもしれないが。

(静岡・静岡教会)

思い出 志在千里

「紀要論文検討会に参加

させていたただいて」

本荘教会 早藤昭一



教学研究所以の出会いとは特別のことは無いと思う。教学の素

養は皆無で、まったくの門外漢である東北の片田舎に住む教師に、もし接点があるとすれば、初代布教者くらいで、研究所とは無縁の存在である。私の師匠は教えそのものが布教一本槍で通してきた方で、教会の働きを救済、育成、布教、奉仕と教義的に区分けして教えることはない。ご用そのものが布教と割り切っておられ、その事と関わりがあるかどうかは、分からないが「読信」が刊行されておった頃、布教部主催の座談会に、若手の初代布教者三人が呼び出され、タイトルは記憶にないが内容は布教に関わって読信に掲載された。旧聞に属するので、お許しを頂き、出席者は、兵庫の瀬崎師と、後の二人は奇しくも出社同志である、天童の渡辺師と私。その頃の師匠は弟子作りの最中で、布教の中心は教師育成にありと、心血をそそいでおられた。そんな事があつてか、福嶋義次所長の折、先覚先師の布教当初の「苦心やご苦勞の歴史が紀要

に掲載され、その号教は忘れ去ったが、その紀要論文の検討会に出席を要請された。私は前述のごとく教学はズブの素人なので赤恥をかくよりはとお断わりをしたが、論文を熟読玩味し、それに対しての批判なり、意見を「布教者として、主張をしてもらえればと云う事であつたと思う。まだ出仕迄に間があるのと、布教についてならと参加をさせて頂くことにした。その考え方は甘かった。執筆者三人にゲストの教師三人それに大学教授二人、所長始め部長や所員、その他の方々で検討会が開始された。一言でいえば本教教学の何んたるかを忌憚なく自由闊達に語られる弁論の場がここにはあり、更に意外性を感じさせる程、緊迫した場面や、微苦笑を誘う等、和やかさもあり、布教のバックボーンに教義の真髄を把握していないと信心や布教を論ずるに危惧を覚えるのも、この検討会に参加させてもらったおかげと思わせて頂いた。私の出席は散々たるもので、相済まなさを今以て恥じ入るばかりで、信心の自己吟味と信仰実践を教学の両輪として研鑽を進めておられる研究所の業績や研究所員の探求心に賛辞を送って結びとさせていただきます。

(昭和五七年・第一四回紀要掲載論文検討会出席者)

平成20年度研究題目

- 【第一部】 ○加藤実 「大谷村の地域社会と金光大神の信仰世界」
- 岩崎繁之 『書(描)く』行為から見る『お知らせ事覚帳』一筆写体験ノート」
- 【第二部】 ○大林浩治「研究者と当事者との協働的信仰理解の可能性
—阪神淡路大震災の体験聴取調査を通じて—」
- 高橋昌之「教会における「場」の自己生成—聴取調査を通して—」
- 【第三部】 ○児山真生「神道金光教会時代における地域秩序と信仰展開の諸相」



思い出 志在千里

「戦闘集団・研究所」

栗林教会 高橋行地郎



十六年間の教学研究生活は、常に戦いの生活だった。本教唯

一の戦闘集団内での戦いという野生を持った人間が、実に生き生きと生きていたのである。その戦いは、破滅のための非生産的なものではなく、新しい信仰価値を創造するためのものだった。戦いの姿勢なき者は去れというのが所是で、野性味の少ない私は、職業病の十二指腸潰瘍と戦いながらずいぶん鍛えられたものである。

研究者は、教内外の先行論文や教団の既成概念と戦う。直信や教監、大先輩のものであっても、抗体が頑強なものであるほど、奮い立ってそれらに挑んでいく。

この大それた戦いが有効であるためには、資料による正鵠を得た裏打ちがなければならぬ。新資料の発見、厳格な資料批判と援用、自己流の資料解釈に陥る危険性との戦いなどの研究営為が必須要件となる。

それらへの検討は、まず職員間でなされる。所長

であれ所員・助手であれ、研究という点では同じ地平に立って、容赦なく戦い合うのである。特にライバルとの壮絶な戦いは、徹底を極めた。人間性が否定される時もあるが、戦い耐え抜き、示唆を受容、昇華した者が、教内外に謙虚に且つ誇らしげに発表の榮譽に浴するのである。

研究所での戦いは、アルコールとの戦いにも及ぶ。研究に疲弊した頭と体を癒すのは、廉価にして巨大な、シビンと呼んでいたウイスキーであった。粗末な肴を食らいながら、一杯飲んでの研究談義に花を咲かすが何よりも楽しかった。ただ、鯨飲すると、数日は体調不良で研究は捗らない。お酒との戦いは塩梅が大切なのだ。

スポーツでの戦いも楽しかった。狭い前庭での特別ルールによるソフトボールやバレーボール。昼の時間は職員のヒートアップタイムで、こうした戦いは、休憩時間との戦いでもあり、しばしば上司からお叱りを頂いた。

要するに教学研究での根源的な戦いは、自分との戦いである。信仰者・研究者としての自己は、どこに立って生を営んでいるのか、という問いからの戦いである。

今後も研究所OBとして、甘木の安武松太郎先生のお歌、「われよしと思ふ心を仇として 戦ひて行け日毎夜ごとに」を抛り所に大いに戦っていきたいものである。

(元部長)

検討会の「面白さ」

―平成一九年度研究報告検討会を振り返って―

研究報告主査

助手 島田悠香

平成一九年度は、研究報告一〇編と業務報告一編が提出されました。その後、二週間にわたって検討会を行いました。

筆者(島田悠香)にとって、これまで研究所の「二月」といえば、研究報告提出までは書けるかどうかでハラハラ、ドキドキ。検討会では、「何を言われるのだろうか」「何を言えば良いのだろうか」を思いつつハラハラ、ドキドキ。緊張の連続で、脈拍は上がりっぱなし。でも今年は、三回目ということもあってか、今までのおっかなびっくり一辺倒から、少しは「面白さ」を味わうことが出来たように思います。

そこで、今回は、例年の職員による「研究報告座談会」から趣向を変えて、研究報告主査が今年の検討会を通して感じた「面白さ」をエッセー風にお届けします。

提出された研究報告は、年季の入った課題から今年初めてのものまで様々でありました。今年の場合、一〇編中三編が新助手(堀貴秋、高阪有人、佐田與一郎)のものであったことに加えて、今年から取り組まれた研究が幾つかあって、読む者にとっては新しい研究と出合うワクワク感がありま

した。また、筆者自身にとつても、検討会といえはいつも“トップバッター”だったのが、今回は四番目になったこともあって、検討会自体の景色がいつもと違つて見えました。

まず、お披露目も兼ねて新助手三人の取り組みから紹介します。

最初に、佐田報告。「神の名がなぜ書けるのか?」これは「神名書付」の表記の分析に取り組む彼の疑問であります。もつとも、それがどのような性質の疑問なのか、よくよく整理、検討した後でなければ、そもそも問いと成り得るのかどうかは分かりません。しかし、荒削りゆえにか、はたまた外連味がないゆえにか、彼の取り組みには「もしかして」と思わせる雰囲気があります。加えて、「私の在籍教会には教祖直筆の『神名書付』がありません」と聞けば、「この人は何かに導かれているのか?」と少々オカルト的な考えも頭をよぎります。さて、当の検討会では、本人もさることながら、周知の方があれやこれやと想像を掻き立てられたこともあって、書かれたことのみならず、書こうとした思いの部分も含めて、出席者相互に自らが思った(感じた)研究の可能性を積極的に提起し、それを楽しもうという流れで進みました。振り返ればこの時、今年の検討会の雰囲気が決まったように思います。

また彼の場合には、このことに取り組むにあつて「新たに経験される震災」という視点を留意し、聴取そのものを研究の内実にしていこうとするユニークな報告でした。そして、堀報告では、在籍教会が所蔵する資料の整理、分析を通じて、地域社会において成り立つ教会の様相を捉えようとししました。彼が注目した「奉獻者名簿」は、期間は正から昭和に亘る約半世紀、それに記載されている延べ人数はおよそ一万人とのこと。この分析によっていかなる教会の姿を描き出すのか、今後の取り組みに期待を抱かせるものでした。

以上、新助手の取り組みのさわりを紹介しました(詳しくは今年九月刊行紀要第四八号の論文概要をご覧ください)。三人それぞれ、研究対象としているものは違います。けれども、研究対象を自らの直近に引き寄せようとしたり、また、対象へのめり込んだり、そして時に、対象と自らの距離が分からなくなりながら格闘している彼らの様子を見ながら、それがなにか教学研究そのものの清新な息吹のようにも思われて、筆者自身の研究意欲がすぐられる思いがしました。

さて、この度の研究報告には、資料や調査結果の分析に取り組んだものが多くありました。資料で言えば、先に紹介した堀報告をはじめ、神道金光教会時代の教務資料を用いた児山報告、金光四神の帳面に注目している高橋報告、「覚帳(写真版)」の筆跡から金光大神の心奥に迫ろうとした岩崎報告があり、また、調査関係では、高阪報告をはじめ、

民間信仰調査の成果を用いた佐藤報告があります。日頃はそれぞれ取り組んでいるので、それほど意識はしていませんでしたが、検討会の場に一度に揃うと、「うわあ、多いなあ」という感じがしました(実際、検討会中にデジヤビュのような感覚におそわれたことは一度や二度ではありません。そのおかげでしょうか、理解がより深まった? ように感じられました)。

こうした状況に「何か偏っているなあ」とつぶやいた人もいましたが、もちろん、全員が右記のような報告だったわけではありません。一九六〇年代の言論空間を対象に、感情を抑圧してしまうメカニズムに触れ、戦後教団を論じた大林報告や、「此方地内」の意味を金光大神の心性から論じた加藤報告のように、新たな視点や方法論の提示を試みながら歴史認識パラダイム、教義解釈基盤を問い直そうとした報告も提出されています。

興味深かったのは、似たような作業をしていながらも、それぞれ課題やテーマは違うということが大写しになったことです。改めて、お互いの違いを意識することで「お互いをシンクロさせているものとは何か」を見たいとする思いが強くなり、それが「私は、あなたの研究のここが面白いと思う」というコミットを意欲した発言となつて現れたのが今回の検討会の特徴であつたと思います。それと共に、こうした意欲をもって新たな関係を築く(に気付く)、これが検討会の「面白さ」なんだ、と思えました。



研究生紹介



今年度の研究生は、白石淳平、高司智太郎、長井美智恵の三名。九月三十日までの五か月間委嘱され、実習に取り組む。今回は、研究生にユーモア(?)を込めて、入所前後の「研究所イメージ」について書いてもらった。「こんな世界として研究所をイメージしている私です」という自己紹介になっているのかもしれませんが…。

「研究所」というところ

第一部 白石淳平

(愛媛・南宇和教会)

研究所という所、そのイメージは入所前後で基本的に変わってはいない。研究所というところは、動物園であり、博物館である。入所前は、その謎めいた印象や不安から、動物園の中の猛獣館や爬虫類館に恐る恐る足を踏み入れるような気持ちと、博物館に行く時のあの言い知れぬワクワク感とが混在していた自分であつた。

入所から一週間余りを経た今思うのは、やはり動物園で博物館だ、ということである。しかし、実際に研究所で過ごす毎日の中で意外だったのは、珍しくて可愛らしい数々の不思議な生き物との出逢いである。しかもその可愛らしい生き物は、膨大な知識と資料と、ほんの少

し?のお酒を餌として育つ、ということである。こんなに多種多様な「知」と「存在」がどうしてこの「研究所」という一つの場所に集まったのか。餌を求めたのか、それとも餌が呼び寄せたのか?

求めざるをえない「何か」、引き寄せられざるをえない「何か」の力。「何か」が何であるのかは分からないし、自分が呼び寄せられたモノかどうか分からないが、その「何か」を、教祖金光大神の信心、祈りであると感じたい。そして、研究所に在るといふことは、自らは観賞する側であるとともに、展示される側でもあるということなのだろう。豊富な餌と、不思議な生き物に囲まれながら、研究所の力の流れに身を任せ、そしてたまに抗いつつ新たな自分とも出逢い、展示する側として「何か」を表現できるように、「何か」を見つめ続けていきたいと思う。

「酔研」

第三部 高司智太郎

(大分・青山教会)

研究所に入って十一日が経過した。こは強いて喻えるなら、いろんな酒が置いてあるバーのようなところ。目移りしそうな資料の豊富さもさることながら、所員の先生方もそれぞれ色や香り、味が違う。研究所に入る前は、外から雰囲気を感じてみて鬼門的な感じがあつた。なぜかここで指導を受けていることに神計らいを感じざるを得ない。入ってみて「研究所酔い」といっていいような感覚



長井 高司 白石

ころは。まだ酔いから醒めない今日このごろ。「問い」ではなく「酔い」は更に更に深くなっていく。

「山の上はナイーブです」

第二部 長井美智恵

(千葉・柏教会)

「研究所はおそろしいところです!」いつからこのイメージが私に植え付けられたのかは覚えていませんが、学院に在る間はずっと、「研究所」精神の破壊「奇人変人集団」という図式があり、「山の上ではきつと世にも恐ろしいことが行われているに違いない:クワバラクワバラ」と恐れおののいていました。しかし、恐れながらも、なんだか気になる、ニクい存在の研究所。とうとう、怖いもの見たさ、そして勿論、このお道への探究心から入所を志し、念願の山の上生活の始まりを迎えました。

まず入所して確信したことは、「研究所は一人残らず奇人、変人の集まりである」ということです。これは間違いありません。お一人お一人に漂う雰囲気、一般人に比べて何か違います。けれど、そのズレは荒らくれ者故のズレではなく、本当はとも繊細でナイーブで、乙女チックであるが故のズレなのです。研究所の先生方は、十七歳の乙女です。そして、昼食には、インスタントラーメンを食べる方が多いことも、即席の調査で判明してきました。健康に気をつけて頂きたいとお祈り申し上げます。

▽人事異動△

(平成19年6月1日～平成20年5月31日)

一、職員(教団職員)
 ○所員宮本和寿、6月30日付で辞任。○教師堀貴秋、同高阪有人、同佐田與一郎、10月1日付で助手に任命。○助手岩崎繁之、11月1日付で所員に任命。○書記金光未来子、12月1日付で主事に任命。○部長加藤実、第2部長兼第1部長の指名を、同大林浩治、第3部長の指名を、3月31日付でそれぞれ解く。○幹事児山真生、3月31日付で幹事を辞任。○助手佐田與一郎、3月31日付で辞任。



所員児山真生、4月1日付で部長に任命。○所員高橋昌之、4月1日付で幹事に任命。○部長加藤実は第1部長に、同大林浩治は第2部長に、同児山真生は第3部長に、4月1日付でそれぞれ指名。二、研究生

○研究生堀貴秋、同高阪有人、同佐田與一郎、9月30日付で委嘱期間満了。
 ○教徒白石淳平、同高司智太郎、同長井美智恵、5月1日付で研究生を委嘱。
 三、嘱託

○嘱託渡辺順一、6月30日付で委嘱期間満了、7月1日付で再度委嘱。
 四、研究員

○研究員保坂道照、9月30日付で委嘱期間満了、10月1日付で再度委嘱。
 五、評議員

○教師松沢光明、2月20日付で任命。
 ※5月31日現在在所職員16名(所長1部長3幹事1所員1助手4事務長1主事5)、研究生3名、嘱託10名、研究員5名、評議員6名

♪おめでた♪



(平成19年6月1日～平成20年5月31日)

★結婚

○主事中西教幸は9月16日、吉田美由祈さん(熊本・肥後大津)と結婚

○助手島田悠香は3月2日、金光吉浩さん(本部)と結婚

☆出産

○所員高橋昌之・直子夫妻に6月16日、二男光輝ちゃん誕生

○所員岩崎繁之・沙弥香夫妻に1月23日、長女彩菜ちゃん誕生



SAKAMICHI

○今年も無事に『聖ヶ丘』を刊行させて頂くことができました。原稿を執筆してくださった方々には御礼申し上げます。

○今号は、新企画として「現地調査の魅力」について特集を組んでみました。調査の様子を楽しんで頂けたでしょうか。研究者が研究する上で、資料から窺えることや、それまで持ち得た知識や経験には限りがあり、頭では理解していたつもりでも、現地へ行くと大きく認識が変わるほどの衝撃を受けることがあります。今後も教学研究を進める上で、現地で体験するという事を大切にしたいと考えております。もともと、予算の許す限りではありませんが……。

○今年の生神金光大神大祭時にある女性教師が来所されました。この方はご夫妻共本所OBです。この度の来所は平成一八年秋にご主人がご帰幽されて、一年が過ぎ、「主人に会えるような気がして」と、一緒にご用した研究所を訪れた、とのことでありました。所内を案内すると、部屋のレイアウト等が変わっている事に、少々戸惑いを感じられた様子でした。それから在任中の思い出として、概説書作成時期には、客殿で毎日の様に会議があり、掃除を含めてその準備が大変であったこと、また、所長大淵先生の為に入り口両横に花壇を造り、それが今も残っている事等々、いくつも興味深いお話を伺い、草創期に教学研究所を支えておられた方々の思いの一端を垣間見る事ができました。

発行・印刷 金光教学研究所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五) 四二一三一一七

FAX (〇八六五) 四二一三一一九

